

アラブの雪

田村明

アラブといえば灼熱と乾燥の国である。あの砂漠からの熱風は経験してみないと分からない。ところが、アラブ諸国のひとつのヨルダンの首都アンマンで、雪に閉ぢこめられ一晩を明かしてしまった。砂漠にも雪は降るし、季節によっては思いがけない寒さにもなる厳しい風土である。

バクダッドのマスタープランづくりをしている。その関係で時折イラクにはゆくが、今年3月には帰りに一人でアンマンに周った。午後、海面以下392メートルという世界で最も低い土地にある死海に、タクシーを雇って行った。死海は出口のない濃塩水湖で魚は棲まないが、その周辺はレモンの花咲く春になっている。帰路は夕方5時を過ぎた。海拔零メートルの標識を過ぎたころ、運転手が雪だという。確かに雪になってきた。アンマンは標高約800メートルの高原、死海との高低差は1,200メートルほどある。緩い上り坂が続く、吹雪いてきた。三月の雪はべつとりと重く車の窓は真白になる。もうスリップして登れない。いろいろやってみたが止むなく車の中で一夜を過ごすことになってしまった。

アラブ人の運転手ファラは本質的に砂漠の民である。私は「チェーンを持つべきだ」などと云ったが取りあわない。現時点でどうするかが問題である。役所に文句をつけることもない。苛立ちもしない。冷静に事情をしらべに行ったり、何とか車を動かそうとする努力をする。燃料の欠乏が心配だった。ファラは車を動かそうとする以外はエンジンを切ってしまう。明け方、車の中も凍えるほど寒くなったが、数分だけエンジンをかけて僅かに車内をぬくもらせた。冷静、沈着に生存を計っている。砂漠で道が分からなくなったような時はこんな調子であろう。それに、同じ雪に閉ぢこめられたアラブ人が車に乗りこんでくる。このお客さんが、吹雪の中に出て私の車の後ろを押すのである。砂漠の中ではまず自助努力だが、隣人の協力もし合う。

私は、翌々日にはどうしても日本での用事がある。非常の場合はアンマンまで雪中を歩かなくてはならないかもしれない。アンマンまでは20キロ近くある。まず、行動する時のために心身ともに極力エネルギーをセーブしておくことである。朝昼兼用でサンドイッチとビールという軽い食事をしただけである。ポケットに飴が2つあった。まず渋滞したころ一個、いよいよ今夜は帰れないという頃に一個たべた。これだけでも違う。運転手だけが頼りだ。チェーンのことなど云ったが、なるようにしかならないとあきらめる。「死海へ来なければ、明日来ることになれば」などと後悔も出かかるが、心理的に疲れることは止める。明日どうなるかも極力考えない。今どうするかだけである。

何度か車を動かす時、アラブのお客さんたちは車の後押しをしたが私は出ない。事情が分からない私にはハンディがあるし、足を濡らしたら夜はつらい。夜中は薄いコートをうまく使ってできるだけ縮こませた体を包む。マフラーがあった。これで頭と、とくに口、鼻を包む。自分の排気の熱を外へ逃がさないようにする。大部前から尿意があったが、体温を外へ逃がさないために我慢する。不思議に尿意がなくなる。昨夜ホテル到着は明け方3時半、あまり寝てない。いざという時にそなえ、寒い車の中でも極力眠っておかなくてはならない。

幸いに、翌朝除雪車がきて無事アンマンに帰着。同じ時、レバノンでは峠道が大雪になり、車中での凍死も出たという。アンマンを飛立つ機上から真白に雪に覆われて砂漠が見える。向うには白銀のレバノン山脈が光っていた。

(東京銀座ロータリークラブ週報に掲載、1983.3)